

## 強迫的心性と不合理な罪悪感との関連

北川 裕美<sup>\*1</sup>・伊藤 宗親<sup>\*2</sup>

本研究では強迫的心性と不合理な罪悪感との関連を検討するため、大学生・大学院生 330 名（男性 171 名、女性 157 名、性別不明 2 名）を対象に、強迫性格尺度（関山, 2008）と不合理な罪悪感尺度（北川・伊藤, 2013）を使用して質問紙調査を行った。その結果、男性では自己の関与が大きな状況、小さな状況いずれにおいても、女性では自己の関与が大きな状況においてのみ不合理な罪悪感への強迫的心性の影響が明らかになった。

〈キーワード〉 不合理な罪悪感, 強迫的心性, コントロール欲求

### I. はじめに

我々は何か悪いことをすると自分を責めて嫌な気持ちになることがあるが、このような気持ちを罪悪感 (guilt) とよぶ。その定義は多様であるが、規範に背いて過失を犯すことを誘因として生じる意識や感情を指す。Hoffman (1984) によれば、人々は他者の苦しみから共感的苦痛を抱き、その苦しみの原因を自分に帰属した場合に罪悪感を体験する。共感を基盤とした罪悪感共感主導の罪悪感 (empathy guided) とよばれ、適応的な側面をもつといわれてきた (Zahn-Waxler & Kochanska, 1990)。一方、Hoffman (2000 菊池・二宮訳 2001) は共感的苦痛から他者の苦しみを誤って自分に帰属した場合も罪悪感を体験することがあると述べ、これを仮想の罪責感 (virtual guilt) とよんだ。この仮想の罪責感と類似した概念として、羽江・高橋 (2006) が提唱した不合理な罪悪感 (irrational guilt) という概念がある。これは、自分が責任のない場面で体験する罪悪感であり、精神的健康に負の影響を及ぼすことが明らかにされた。それでは、どのような人が不合理な罪悪感を体験しやすいのだろうか。これまで不合理な罪悪感の発生過程に関する研究はあまりみられない。

不合理な罪悪感とは、他者の傷つきに対してその原因を明らかにしたいと思い、誤って自分に帰属することによって生じると考えられる。原因を自分に帰属する要因

は、自分自身はもっともコントロールしやすい存在であるため、その後の対処を考えやすいからである。つまり、不合理な罪悪感を体験する背景には、コントロール欲求があると考えられる。

Salzman, L. (1968 成田・笠原訳 1985) は、強迫パーソナリティ (obsessive personality) の中核的な問題をコントロール欲求と捉えた。彼は、精神分析的な立場から強迫パーソナリティの特徴について、すべてをコントロールし、かつそれが可能であるという尊大な自己像をもつと述べている。強迫現象を強迫神経症という疾病単位として最初に取り上げた Freud, S. (1908 懸田・吉村訳 1969) は、強迫神経症の患者の病前性格の特徴をまとめて肛門性格と名付け、その特徴として過度の抑制 (几帳面、儉約家) と放出 (わがまま) が併存していることを挙げた。その後 Salzman, L. (1968 成田・笠原訳 1985) が、健常者がもつ強迫的な心性から強迫パーソナリティを経て強迫神経症へ至る一連の病像をまとめて強迫スペクトラムとよんだことによって、強迫性格の概念は拡大されたのである。そこで本研究では、健常者のもつ強迫的な傾向を捉えるという目的から、「強迫的心性」という語を用いることとした。

以上のことから、強迫的心性の高い者は、不合理な罪悪感を体験しやすいのではないであろうか。したがって本研究では、強迫的心性が不合理な罪悪感に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。また、青年期には強

\*1 心理教育相談室

\*2 総合情報メディアセンター

迫的心性が高まるといわれているため、本研究では対象を大学生とした。

## II. 方法

**調査協力者:** 大学生・大学院生 335 名を対象に質問紙調査を行った。調査協力者は、A 大学の講義内で講師と筆者との依頼に応じて回答した。全回答者 335 名のうち、欠損値がある者や対象年齢以外の 5 名を除いた残りの 330 名が有効回答者となった。有効回答者の内訳は、男性 171 名、女性 157 名、性別未記入 2 名で、平均年齢は 19.0 歳 ( $SD = 1.15$ ) であった。

### 質問紙の構成:

#### 1) 基本的属性

年齢、学年、性別の記入を求めた。

#### 2) 強迫的心性を測定する尺度

強迫的心性をどの程度有しているか測定するため、関山 (2008) が作成した強迫性格尺度を使用した。これは健常者にもあてはまるような強迫性格特徴を多次的に捉えることができる尺度であり、『完全追求』、『わがまま』、『良心性』、『優柔不断』の 4 つの下位尺度から構成されている。項目数は全 20 項目であり、各下位尺度に 5 項目が含まれている。本研究では、「1. 全くあてはまらない」、「2. あてはまらない」、「3. あまりあてはまらない」、「4. 少しあてはまる」、「5. あてはまる」、「6. とてもよくあてはまる」の 6 件法で回答を求めた。また、「以下に様々な態度や考え方が書かれています。それぞれの文章はあなたにどの程度あてはまりますか。1 “全くあてはまらない” ~ 6 “とてもよくあてはまる” の中であなた自身があてはまると思うところに一つ〇印をつけてください」という教示文のもと回答を求めた。

#### 3) 不合理な罪悪感を測定する尺度

北川・伊藤 (2013) が作成した不合理な罪悪感喚起状況に対する反応 (罪悪感を抱くかどうか) を捉えることができる尺度であり、『自己の関与が小さな状況』と『自己の関与が大きな状況』の 2 つの下位尺度から構成されている。『自己の関与が小さな状況』とは、「大きな事故の被害に遭った人たちに関するニュースを見たとき」などの深刻な状況における不特定多数の人々の傷つきに対して自分が何もできないため経験する罪悪感や、「友

人がミスをして落ち込んでいるとき」などの自分が直接の原因でない状況における他者の傷つきに対して自分が何もできないため経験する罪悪感が含まれる。いずれも自分自身が他者の傷つきの原因となっているわけではなく、他者が傷ついている状況で何もできないこと、できなかったことについて罪悪感を経験する状況である。『自己の関与が大きな状況』とは、「用事があって友人の頼みごとを断ったとき」などやむを得ない理由があって相手の申し出を断った状況において経験する罪悪感や、「自分は志望大学に合格したが、友人は不合格だったとき」自分が相手よりも多くの満足体験を持った状況において経験する罪悪感が含まれる。いずれも自分の行動や自分が他者より勝っていることが他者を不快な気持ちにさせてしまったことに対して罪悪感を経験する状況である。

項目数は全 20 項目であり、各下位尺度に 10 項目が含まれている。本研究では、「1. 全く感じない」、「2. ほとんど感じない」、「3. どちらかというと感じない」、「4. どちらかというと感じる」、「5. 強く感じる」、「6. 非常に強く感じる」の 6 件法で回答を求めた。また、「以下に様々な状況がかかれています。その状況におかれたときあなたはどれくらい強く自分が『悪かった』『悪い』と感じますか。1 “全く感じない” ~ 6 “非常に強く感じる” の中であなた自身があてはまると思うところに一つ〇印をつけてください。これまで経験したことのない状況については想像して回答してください」という教示文のもと回答を求めた。

**手続き:** 調査時期は 2013 年 6 月上旬であった。A 大学で開講されていた 3 講義において受講者を対象に調査協力を依頼し、講義時間内に調査を行った。調査に関する説明をする際に、「収集されたデータは統計的に処理され、個人の回答内容が公表されないこと」、「収集されたデータは研究以外の目的では使用されないこと」、および「調査に参加したくない場合、あるいは途中で回答をやめなくなった場合は回答しなくてよいこと」を伝えた。

## III. 結果と考察

### 1. 各尺度の構成

#### 強迫性格尺度の検討

全 20 項目について「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」を 1 点から 6 点として回答を得点化し、主因子法による因子分析を行った。その結果、固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮して 3 因子解を採用した。因子負荷量が.35 に満たなかった項目「完成度を高めようとして、しめきりに遅れそうになることがある (.28)」と「うそをつくのはとても悪いことだと思う (.29)」と「他の人の仕事について、つい文句や批判を言ってしまうたちだ (.31)」を削除した。残りの 17 項目について再度 3 因子を仮定して主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った結果、累積寄与率は 38.46%であった (Table1)。

第 1 因子は、関山 (2008) が抽出した『完全追求』の 5 項目と『良心性』の 3 項目から構成された。「7. まじ

めだ、とよく人から言われる」は勤勉さを、「11. 他者の不正は許せない」と「3. 誰も見ていなくても、私はルールを守る」は秩序志向性を表しており、いずれも完璧主義と類似した項目と考えられる。したがって第 1 因子は『完全追求』とした。『完全追求』とは、何事においても完璧にこなさなければ気が済まないという傾向である。第 2 因子は、関山 (2008) が抽出した『優柔不断』の 4 項目と『わがまま』の「18. 私はケチだ」、『良心性』の「15. 私は罪悪感をもちやすい」から構成された。この 2 項目は、お金や一つのことに対する執着やこだわりを表しており、『優柔不断』の項目も合わせるといずれも物事に対するとらわれやすさを表していると考えられる。したがって第 2 因子を『とらわれ』と命名した。『とらわれ』とは、ひとつの物事にいつまでもこだわる

傾向である。第 3 因子は『わがまま』に含まれていた 3 項目であるため、因子名は『わがまま』とした。『わがまま』とは、自分勝手にふるまう傾向である。

関山 (2008) は 4 因子を抽出したが、本研究では『良心性』が『完全追求』とまとまって一つの因子になり、3 因子構造になった。その理由の一つとして、関山 (2008) は男子高校生を対象に調査を行ったが本研究では大学生の男性女性いずれも対象にしており、対象とした年齢、性別が異なっていたことが挙げられる。また、良心性はそもそも完全追求と類似した概念であるため一つの因子に集約しやすかった可能性が考えられる。

信頼性を検討するため各因子についてクロンバックの  $\alpha$  係数を算出した結果、いずれも十分な値を示した ( $\alpha = .81, \alpha = .82, \alpha = .67, \alpha = .70$ )。また、17 項目の合計得点を『強迫的心性』得点とし ( $M = 67.6, SD = 10.25$ )、3 つの各下位尺度の項目の合計得点を算出し、それぞれ『完

Table1 強迫性格尺度の因子負荷量 (主因子法, バリマックス回転)

尺度項目	I	II	III	共通性
I. 「完全追求」因子 ( $\alpha = .82$ )				
9 やるべきことは徹底的にやりたい。	.784	.044	.092	.625
1 納得できる完成度になるまで、私は努力する。	.764	-.081	.108	.601
5 何事も完璧にやらないと気がすまない。	.699	.239	.165	.573
13 手がけた仕事は、最後まで自分でやり通さなければ納得できない。	.656	.031	.120	.446
7 まじめだ、とよく人から言われる。	.515	.248	-.041	.328
17 よい結果を残すために楽しみを我慢するのは当然だと思う。	.469	.099	-.045	.232
11 他者の不正な行為は許せない。	.449	.179	.121	.248
3 誰も見ていなくても、私はルールを守る。	.419	.126	.003	.192
II. 「とらわれ」因子 ( $\alpha = .67$ )				
4 私は判断するのに長い間迷う。	.127	.680	-.016	.479
16 私は、小さなことでも時間をかけて考える。	.381	.479	.094	.384
15 私は罪悪感をもちやすい。	.218	.478	-.001	.276
20 ふだんは使わない物でも、捨てられない。	-.033	.456	.042	.211
8 計画通りにいかないと、困ってしまう。	.287	.434	.078	.277
18 私はケチだ。	-.002	.386	.139	.168
III. 「わがまま」因子 ( $\alpha = .70$ )				
6 頑固だ、とよく人から言われる。	.166	.080	.760	.612
2 私は意地っ張りだ。	.287	.026	.633	.483
10 自分勝手だ、とよく人から言われる。	-.130	.141	.605	.402
因子寄与	4.03	1.31	1.20	
寄与率	23.71	7.70	31.40	
累積寄与率	1.20	7.06	38.46	

※網掛け部分は因子負荷量が.35以上であることを表す。

全追求』下位尺度得点 ( $M=32.3, SD=6.27$ ) , 『とらわれ』下位尺度得点 ( $M=24.0, SD=4.69$ ) , 『わがまま』下位尺度得点 ( $M=11.3, SD=2.95$ ) とした。

### 不合理な罪悪感尺度の検討

全 20 項目について「全く感じない」から「非常に強く感じる」を 1 点から 6 点として回答を得点化し、20 項目の合計得点を『不合理な罪悪感』得点とした ( $M=62.9, SD=15.18$ ) 。また 2 つの各下位尺度の項目の合計得点を算出し、それぞれ『自己の関与が小さな状況』下位尺度得点 ( $M=29.0, SD=9.67$ ) , 『自己の関与が大きな状況』下位尺度得点 ( $M=33.8, SD=7.60$ ) とした。

## 2. 性差の検討

上述した 2 尺度について性差の検討を行った。まず強迫性格尺度について、男性と女性それぞれについて強迫的心性に関する尺度得点を算出し、平均値の差の検定を行った。その結果、『強迫的心性』(男性:  $M=67.6, SD=10.30$ , 女性:  $M=67.7, SD=10.17, t(326)=0.101, ns$ ) , 『完全追求』(男性:  $M=32.6, SD=6.26$ , 女性:  $M=32.1, SD=6.24, t(326)=0.699, ns$ ) , 『とらわれ』(男性:  $M=23.9, SD=4.88$ , 女性:  $M=24.2, SD=4.48, t(326)=0.616, ns$ ) , 『わがまま』(男性:  $M=11.1, SD=3.13$ , 女性:  $M=11.4, SD=2.76, t(326)=0.850, ns$ ) いずれにおいても有意差は認められなかった。したがって、強迫的心性において性差はみられないと考えられる。次に不合理な罪悪感尺度について、男性と女性それぞれについて不合理な罪悪感に関する尺度得点を算出し、平均値の差の検定を行った。その結果、『不合理な罪悪感』では有意差が認められ(男性:  $M=60.4, SD=14.8$ , 女性:  $M=65.5, SD=15.2, t(326)=3.087, p<.01, r=.17$ ) , 女性の方が男性よりも不合理な罪悪感を強く抱いた。下位尺度の『自己の関与が小さな状況』では有意差が認められ(男性:  $M=28.0, SD=9.4$ , 女性:  $M=30.2, SD=9.8, t(326)=2.060, p<.05, r=.11$ ) , 女性の方が男性よりも自己の関与が小さな状況において罪悪感を強く抱いた。また、『自己の関与が大きな状況』では有意差が認められ(男性:  $M=32.4, SD=7.4$ , 女性:  $M=35.4, SD=7.6, t(326)=3.534, p<.001, r=.19$ ) , 女性の方が男性よりも自己の関与が大きな状況において罪悪感を強く抱いた。以上から不合理な罪悪感とその

下位尺度得点において性差が認められたため、以降の分析を男女別に分けて行った。

不合理な罪悪感得点、各下位尺度得点の平均値において、いずれも女性の方が男性よりも高い値を示しており、性差が認められた。羽江・高橋 (2006) も女性の方が男性よりも不合理な罪悪感を経験しやすいことを明らかにしており、本研究でも同様の結果が得られた。羽江・高橋 (2006) は性差について、女性は男性よりも他者への配慮や情緒的結びつきが強いため、相手に与えた可能性のある害について気にしやすいのかもしれないと述べている。また、従来の研究では女性の方が男性よりも罪悪感そのものを強く感じることを示されている(石川・内山, 2002) 。特に青年期においては性差が顕著にみられるようになって、女性の方が罪悪感を強く感じることも示されており、その要因として、性役割や幼少期における両親のしつけの相違が考えられている(Bybee, 1998) 。女性が男性と比べて他者への配慮が強いというよりは、社会的にそうあることが求められるため、結果として他者への配慮が強くなり、罪悪感を強く感じるようになると考えられる。したがって、他者の傷つきに配慮することが多く求められる女性は、他者の傷つきに気付きやすく、なおかつ責任を感じることによって不合理な状況においても罪悪感を抱きやすいのではないであろうか。

また、女性の方が男性よりも共感性が高いことが示されている(出口・斎藤, 1991) 。共感性と罪悪感が密接に関係することは Hoffman (2000 菊池・二宮 2001) によって示されており、女性が男性よりも共感性を高くもつため、罪悪感を強く抱くといえるであろう。不合理な罪悪感とは他者の傷つきを敏感に感じ取り、共感することによって生じると考えられるため、共感性の高い女性が不合理な罪悪感を抱きやすいと考えられる。

## 3. 各変数間の関連

各変数間の関連を検討するために、男女それぞれのピアソンの相関係数を算出した (Table 2, 3) 。その結果、強迫的心性と不合理な罪悪感との間では、男女いずれも『自己の関与が大きい状況』と『強迫的心性』(男性:  $r=.27$ , 女性:  $r=.26$ ) , 『完全追求』(男性:  $r=.20$ , 女性:  $r=.23$ ) , 『とらわれ』(男性:  $r=.36$ , 女性:  $r=.24$ ) と

Table2 男性における強迫的心性と不合理な罪悪感の相関係数

	強迫的心性	完全追求	とらわれ	わがまま	不合理な罪悪感	自己の関与が小さな状況	自己の関与が大きな状況
強迫的心性		.822**	.719**	.527**	.209**	.116	.271**
完全追求			.311**	.222**	.190*	.140	.201**
とらわれ				.187*	.245**	.106	.356**
わがまま					-.072	-.062	-.065
不合理な罪悪感						.907**	.843**
自己の関与が小さな状況							.539**

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table3 女性における強迫的心性と不合理な罪悪感の相関係数

	強迫的心性	完全追求	とらわれ	わがまま	不合理な罪悪感	自己の関与が小さな状況	自己の関与が大きな状況
強迫的心性		.863**	.763**	.492**	.120	-.018	.263**
完全追求			.434**	.211**	.096	-.028	.228**
とらわれ				.206**	.137	.025	.241**
わがまま					.003	-.043	.061
不合理な罪悪感						.904**	.832**
自己の関与が小さな状況							.515**

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table4 男性における強迫的心性からみた不合理な罪悪感の平均値の差

	強迫的心性	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i> 値	<i>df</i>	<i>p</i>
不合理な罪悪感	低群	79	57.2	13.37	2.610	169	.010
	高群	92	63.1	15.50			
自己の関与が小さな状況	低群	79	26.3	8.61	2.096	169	.038
	高群	92	29.3	9.95			
自己の関与が大きな状況	低群	79	30.9	6.70	2.527	169	.012
	高群	92	33.7	7.74			

Table5 女性における強迫的心性からみた不合理な罪悪感の平均値の差

	強迫的心性	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i> 値	<i>df</i>	<i>p</i>
不合理な罪悪感	低群	77	64.4	14.06	0.890	155	.375
	高群	80	66.5	16.23			
自己の関与が小さな状況	低群	77	30.5	9.80	0.441	155	.660
	高群	80	29.8	9.93			
自己の関与が大きな状況	低群	77	33.9	6.49	2.397	155	.018
	高群	80	36.7	8.29			

の間に 1%水準で有意な正の相関がみられた。また、男性のみにおいて、『不合理な罪悪感』と『強迫的心性』( $r = .21$ ), 『完全追求』( $r = .19$ ), 『とらわれ』( $r = .25$ )との間に 1%水準において有意な正の相関がみられた。

男女いずれも、強迫的心性得点及び各下位尺度得点と

『自己の関与が小さな状況』得点との間に有意な相関が認められなかった。『自己の関与が小さな状況』はより不合理な状況であるため、罪悪感を有する人が少なく、強迫的心性との明確な関連が示されなかったと考えられる。また、男女いずれも、『わがまま』と不合理な罪悪感得点及び各下位尺度得点との間に有意な相関が認められなかった。その理由として、『わがまま』は利己的な特徴も強く有しているため、他者の傷つきをわざわざ自分の責任として捉えにくいことが挙げられるであろう。

#### 4. 強迫的心性と不合理な罪悪感との関連

強迫的心性得点の中央値 (*Median* = 67.5) を基準に調査協力者を 2 群に分類した。低群には 173 名 (男性 79 名, 女性 77 名), 高群には 157 名 (男性 92 名, 女性 80 名) が分類され, 2 群に関して平均値と標準偏差を算出した。そして, 強迫的心性と不合理な罪悪感の関連を検討するため *t* 検定を行った (Table4, 5)。

**男性:** 強迫的心性得点低群と高群について「不合理な罪悪感」得点の平均値の差の検討するため *t* 検定を行った結果,

有意差が認められた ( $t(169) = 2.610, p < .05, r = .20$ )。したがって, 高群は低群に比べて「不合理な罪悪感」得点が高かった。次に, 強迫的心性得点低群と高群について「自己の関与が小さい状況」得点の平均値の差を検討するため *t* 検定を行った結果, 有意差が認められた ( $t$

(169) = 2.096,  $p < .05$ ,  $r = .16$  . したがって、高群は低群に比べて「自己の関与が小さい状況」得点が高かった. 次に、強迫的心性得点低群と高群について「自己の関与が大きい状況」得点の平均値の差を検討するため  $t$  検定を行った結果、有意差が認められた ( $t(169) = 2.527$ ,  $p < .05$ ,  $r = .19$ ) . したがって、高群は低群に比べて「自己の関与が小さい状況」得点が高かった.

女性：強迫的心性得点低群と高群について「不合理な罪悪感」得点の平均値の差を検討するため  $t$  検定を行った結果、有意差は認められなかった ( $t(155) = 0.890$ ,  $ns$ ,  $r = .07$ ) . 次に、強迫的心性得点低群と高群について「自己の関与が小さい状況」得点の平均値の差を検討するため  $t$  検定を行った結果、有意差は認められなかった ( $t(155) = 0.441$ ,  $ns$ ,  $r = .04$ ) . 次に、強迫的心性得点低群と高群について「自己の関与が大きい状況」得点の平均値の差を検討するため  $t$  検定を行った結果、有意差が認められた ( $t(155) = 2.397$ ,  $p < .05$ ,  $r = .19$ ) . したがって、高群は低群に比べて「自己の関与が小さい状況」得点が高かった.

本研究では、強迫的心性が不合理な罪悪感に及ぼす影響を検討した. その結果、男性においては、強迫的心性が高いほど自己の関与が大きな状況、自己の関与が小さな状況いずれにおいても不合理な罪悪感を抱きやすいことが明らかになり、女性においては、強迫的心性が高いほど自己の関与が大きな状況においてのみ不合理な罪悪感を抱きやすいことが明らかになった. また、自己の関与が小さな状況、自己の関与が大きな状況いずれにおいても女性の方が男性よりも罪悪感を抱きやすいことが示された. したがって、強迫的心性を高い者はコントロール欲求が高く、物事の原因を明確にしたいと思う傾向があるため、自分が他者の傷つきの直接の原因でなくとも、自己の関与がある場合には責任を感じて罪悪感が喚起されると考えられる. 一方、男性では自己の関与が小さな状況においても罪悪感の喚起に強迫的心性の影響が認められたが、女性では罪悪感の喚起に別の要因がはたらいっていることが示唆された. 女性においては、不特定多数の他者の深刻な傷つきや親しい他者の傷つきに対して何もできないことを申し訳ないと思うことへの強迫的心性の影響は認められなかった. つまり、原因が自分ではないと明確にわかっている事柄に対して

は罪悪感を経験しないということであろう. 一方、もしかしたら自分が悪いかもしれないとか、少しは自分が悪い、というように自分がコントロールできた余地がある場合に罪悪感を経験すると考えられる. 女性において、自己の関与が小さな状況で経験する罪悪感に影響を及ぼす要因については今後も検討していくことが必要と考えられる.

## 引用文献

- Bybee, J. 1998 *Guilt and Children* San Diego: Academic Press.
- 出口保行・斎藤耕二 1991 共感性の発達の研究 東京学芸大学紀要, 42, 119-134.
- Freud, S. 1908 「性格と肛門愛」 懸田克射・吉村博次 訳 1969 フロイト著作集 5 人文書院
- 羽江未里・高橋靖恵 2006 青年期における罪悪感が精神的健康に与える影響—対人場面におけるとらわれと不合理さを中心として— 日本青年心理学会大会発表論文集, 14, 32-33.
- Hoffman, M. L. 1984 *Empathy, its limitations, and its role in a comprehensive moral theory* New York: Wiley.
- Hoffman, M. L. 2000 *Empathy and Moral Development - Implications for Caring and Justice* - Cambridge University Press.
- (菊池章夫・二宮克美訳 2001 共感と道徳性の発達心理学：思いやりと正義とのかかわりで 川島書店)
- 石川隆行・内山伊知郎 2002 青年期の罪悪感と共感性 および役割取得能力の関連 発達心理学研究, 13 (1), 12-19.
- 北川裕美・伊藤宗親 2013 不合理な罪悪感尺度作成の試み 岐阜大学カリキュラム開発研究, 30(1), 66-72.
- Salzman, L. M, D. 1968 *The Obsessive Personality -Origins, dynamics and therapy-* Jason Aronson, Inc.
- (成田義弘・笠原嘉訳 1985 強迫パーソナリティ みすず書房)
- 関山徹 2008 高校生における強迫性格と精神的健康 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 18, 163-17.
- Zahn-walxler, C., & Kochanska, G. 1990 *The origins of guilt* Lincoln : University of Nebraska Press.